

第一回歩き遍路 土佐ノ巻その一

2014年10月26日～11月4日

徳島県日和佐～24番最御崎寺～36番青龍寺～須崎

遍路距離 270 km



24番 最御崎寺 25番 津照寺 26番 金剛頂寺 27番 神峯寺 28番 大日寺 29番 国分寺
30番 善楽寺 31番 竹林寺 32番 禅師峰寺 33番 雪蹊寺 34番 種間寺 35番 清瀧寺
36番 青龍寺

前回第1回目は、徳島県の最後の札所・日和佐の第23番薬王寺まで巡礼したので、今回の第2回目は日和佐から高知県に入り、高知県の最初の札所・室戸岬の第24番最御崎寺から土佐市宇佐町の第36番青龍寺まで巡礼して、浦ノ内湾(横浪三里)を越えて須崎市まで巡ったものである。

10月26日 (自宅～高松～徳島県海部郡日和佐町日和佐)

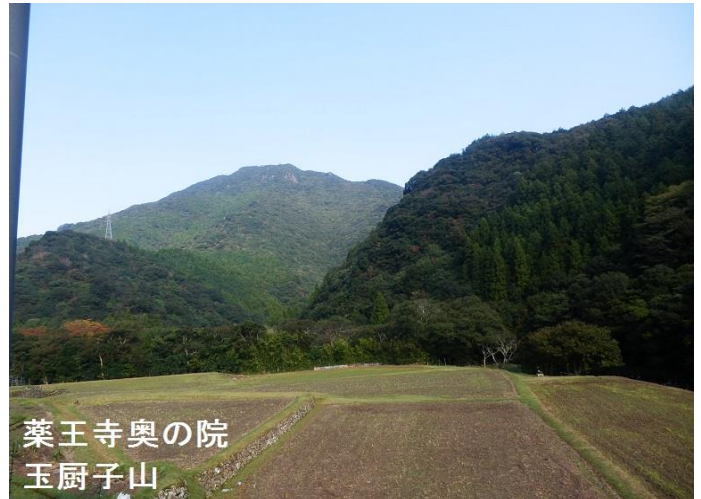
自宅⇒高松⇒日和佐、「きよ美旅館」泊。魚料理が美味しいという「ふなつき旅館」は満員で予約できず。「きよ美旅館」はオカミが一人でやっている古い宿で、設備も全く古いが愛想は良い。1泊2食7,500円。
※同宿は1人のみ。大分県佐伯市からの還暦記念通し打ちの兄玉さん。

10月27日 (日和佐～徳島県海部郡海陽町鯖瀬)

●宗教学者・五来重著「四国遍路の寺」によれば、空海も含めて昔の修験者の修験の地は今の札所がある寺域そのものだけではなく、寺域の山頂とその稜線が海に落ちる岬突端の断崖絶壁を巡る修業であったそうで、これを「行道」と言い、山頂や断崖絶壁の修験の場所が「奥の院」である。四国の修験の「行道」は、元来は土着海洋宗教から発生したもので、海と陸地の間(境)を修業して歩く場所(行為)を「辺地」と呼び、この「辺地」が「辺路」に、更に「辺路」が後の「遍路」になった。という訳で、本来の

修験の跡を辿るためには「奥の院」まで足を延ばさねばならないそうだ。札所それぞれに奥の院があるが、巡礼路から遠く離れた場所にある場合も多く、全ての奥の院に立ち寄ることは難しい。

前出の「四国遍路の寺」の『薬王寺』の項には、日和佐の町の奥に聳える玉厨子山 543m は日和佐の港に入る船の目当て山にもなっている秀麗な山で、ここが薬王寺の奥の院であり、海の彼方の常世信仰が行われていた頃には日和佐沖にある立島が王子（常世の神がまず上陸する場所）であり、常世の神はこの王子に上陸して険しい岩山がある玉厨子山に上り、それから浜に近い場所に出来た薬王寺に降りてきたと言われて



いる。この立島と玉厨子山を結ぶ直線の途中に薬王寺が作られた訳で、この三点が一直線上にあることが、海洋宗教（常世信仰）と山岳宗教の相互関係を示しているように思えて興味深い（四国の殆どの札所は海が臨まれる地にあり、四国遍路（那智信仰も同様）は元来は海洋宗教によるもので、それがやがて山岳宗教に変化したという説）。

という次第で、今回は奥の院「玉厨子山」に立ち寄ろうと、一般的な遍路道となっている国道 5 号

経由ではなく、日和佐川沿いの県道 36 号線を登って行った。クネクネと曲がった長い山道であった。途中で山から出て来た野良犬が付いて来て離れない。山道とはいえ車も通るので、右や左にヨタヨタと歩く犬が車に轢かれそうになって危なくてしかたない。相当腹が減っている様子だったので可哀そうに思い、先程麓のコンビニで買ったばかりの本日用の弁当を与えて、それを喰っている間に引き放そうとしたが、弁当は僅か 5 秒ほどの間に空になって、小生を見上げてそのまま付いて来る。



昔は飼い犬だったのだろう、なかなか人懐っこくておとなしい。道が二股に分かれる場所では、ちゃんと待っていて、あたかも道案内をしてくれているかのようだ。イヤ、待てよ、これはひょっとして弘法大師の生まれ変わりではなからうか。さすれば、ご丁重に扱わねばならヌ。

さて、落合橋という峠まで来た。遍路道保存協会の例の黄色本によると、玉厨子山は此处から更に山間に入ると書いてあるが、玉厨子山でありそうな山は見えるが、道順がさっぱり分からない。人家が 1 軒ほどあったが、道を尋ねようにも全く人影が無い。この犬に聞いても、ジ～ット見上げているばかりで要領を得ない。遠望した限りでは路がありそうにも思えず、またあったとしても相当な急傾斜の山道で、山頂まで急いでも往復 2～3 時間は掛かりそうだ。山頂からは日和佐湾から太平洋や紀伊半島の眺めが素晴らしいと思うが、今日の行程を考えるとあまりゆっくりもしておられず、残念であるが奥の院「玉厨子山」はパスすることにした（地形図をよくよく眺めると、かなり手前の西河内という集落の所から山頂のアンテナのメンテナンス道路が伸びていて、これを登る方が簡単であることが分かった。黄色本の記述は正確でない）。

さて、犬の話に戻ろう。落合橋から国道 5 号に出ると JR 牟岐線の山河内駅に出た。ここで犬がよそ見をしている間に国道を跨ぐ歩道橋に上がって隠れて犬を巻こうとした。下の国道を盗み見すると、犬はあちこち歩き回って小生の姿を探している。路側の柵から横の川を覗き込んでクンクンと探し鳴いている。そのうち犬は道路の向こうに行ったらしいので、隠れていた歩道橋を降りて駅に逃げ込んだ。

汽車に乗ってしまえば、犬は付いて来れないだろう。しかし、時刻表を見ると、次の汽車までは2時間もある。2時間の浪費は勿体ないが、犬を巻く方法はこれしかないので、ホームの建屋の陰に隠れていたが、鼻が良い犬は小生を探し出してホームに上がって来た。これでは仕方ない。また犬を連れて国道を歩き始めた。国道だから交通量が多い。それに犬は歩道ではなく、車道を右や左にウロウロと歩く。そのたびに車が急停車したり、急停車した車に後続の車がぶつかりそうになったりした。犬が轢かれるだけではなく、この調子で行けば交通事故も起こりかねない。道の傍に遍路小屋があって、そこで暫し考えるために休んだ。こちらが休めば、犬も寝そべっている。何かを喰わしている間に逃げるという方法も考えてみたが、残念ながら本日の喰い物は先程犬に与えてしまったので何も無い。こちらが歩き始めれば犬も慌てて付いて来る。パンでも買って与えたいのだが、店などというものは全くない山の中。歩道を歩かせるために紐をつけようにも、紐も持っていない。

途中に公衆電話ボックスがあった。しめた、この中に閉じ込めておけば付いて来れないし、そのうち気づいた誰かが出してくれるだろう。しかし、この計略は犬もよく分かっているとみえて、電話ボックスに入って来ない。どこかに縛っておく紐も無い。仕方がないので、また歩き始めた。犬も付いて来る。

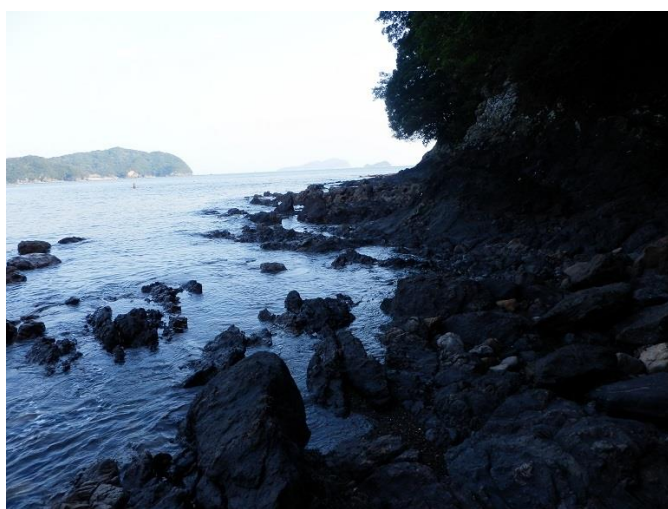
今にも犬が車に轢かれるか、或いは車同士が追突して交通事故が起きるか、ヒヤヒヤしながら歩くので、心ノ臓が停まりそうだ。運転者は小生の顔を見て、犬はちゃんと繋いで散歩させろと言っているような顔付なので、これも塩梅がよくない。全く往生した。やがて、牟岐町境という峠に出た。レストランの如き建物が見えたので、ここで犬の弘法大師に昼飯でも差し上げている間に逃げれるかと思ったが、残念ながら建物は廃墟となっていた。タクシー会社の番号案内の看板があった。ヨシ、タクシーを呼んで逃げよう。呼んだタクシーを待つ間に、犬の首に紐を付けて、それに千円札と「この犬は弘法大師様の生まれ変わりです。お食事でも買ってあげて下さい」と走り書きした紙を結びつけた。タクシーに乗った時、犬は不思議そうな顔で見ていたが乗り込もうとはしなかった。犬が付いてこれられないように、運転手に飛ばして逃げてくれるよう頼んだ。それから犬はどうしただろうか。最初に付いて来た場所から15km程離れた場所なので、無事に元の棲家に帰ったかどうか。また、この冬を越せるかどうか。



(途中で見かけた旧へんろ道しるべ。「へんろ・・・」の文字あり。真念が建てたものか?)

さて、態々呼んで来て貰ったタクシーだから、犬を巻いたら直ぐに降りる訳にもいかない。車で30分ほど先の牟岐駅まで乗車したので、徒歩で3時間程の距離を稼いだことになった。運転手は、お遍路が皆立ち寄るという途中の小松大師に立ち寄ってくれたが、信仰心が無い私には何の変哲もない堂宇だった。牟岐駅からは山中の大坂道を通して草鞋大師に着いた。草鞋大師は、道端の極く小さな祠で、見過ごしてしまっただけで後戻りした。この下の海岸べりにあった食堂（家形舟）でビールを飲んで昼食。

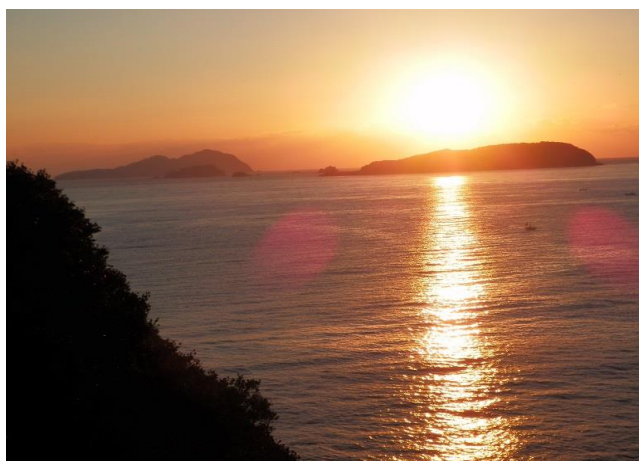
ここら辺から所謂「八坂八浜」が始まる。昔は八ツの山坂と八ツの浜を越えて行く難所であったらしい。小生もその故事に倣って浜に降りて磯伝いに岬の向こうに越えようとしてみたが、2kmほど行った断崖絶壁の岩場で満潮に阻まれて瀬を渡れなかったのが来た磯を引き返したが、途中で満潮で戻れなくなった磯があったら万事休すになっていただろう。磯に入る時には、潮が満ちて来たら、山に逃げればいいやと考えていたが、磯は全て荒波が押し寄せる断崖絶壁で、這い登れるような場所ではなかった。後で考えるとゾ〜ッとしてきた。昼食のビールで注意力が失せていたのであろう。くわばら、くわばら。或いは、先程の犬に生まれ変わった弘法大師様が助けて下さったのかも・・・。



（この磯を伝って見たが・・・）

さて、日和佐の徳島最後の23番薬王寺から土佐最初の室戸岬の24番最御崎寺までは海岸沿いに徒歩で3～4日掛かるが、この間には札所が無い。唯一鯖瀬に八十八ヶ所とは別の四国別格二十霊場第4番の「鯖大師」があるだけである。ここにも参って納経帳に朱印を貰った。宿は岬の高台にある「海山荘」に泊まった。宿泊客は小生1人だけ。海の眺めもサイコー。飯もサイコーッ、オカミの愛想も最高、おまけに2食付4,800円とくれば言うこと無し(予約なしで泊まれた)。元々が漁師の家であったのか、屋上には漁網が干してあり、夕食にもさざえの壺焼きや大エビの塩焼き、ハマチの分厚い刺身も出て、これまた誠に結構であった。

（海山荘から眺めた太平洋の日の出）



7:15 日和佐・薬王寺門前発⇒9:00 落合橋⇒10:15 山河内駅発⇒牟岐境で犬から逃れるためにタクシーで牟岐駅へ(タクシー代 2100 円)⇒12:40 草鞋大師・「家形舟」昼食。ビール 2 本共 2700 円。
13:40 「家形舟」発⇒16:00 鯖大師⇒16:30 海山荘着。2 食付 4,800 円。本日の踏破距離 = 25 km。

※「鯖大師」とはヘンな名前である。一般的に「葦酒山門に入るを許さず」で生臭い魚などは仏門から遠ざけられている。この鯖大師の大師堂には弘法大師が鯖をブラ下げている大師像や鯖を供えた石像もあった。



寺伝によれば、昔々、大昔、行基菩薩がこの地、八坂八浜の大坂を通り掛かった時、馬子が塩サバを積んだ馬を引っ張っているのに出くわした。行基菩薩は馬子に鯖 1 匹を所望したが、馬子は呉れなかった。そこで行基は次の歌を詠んだら馬が苦しみ始めて歩かなくなったという。「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれで馬の腹病む」。馬方はびっくりして、これはただの人ではないと思い、鯖を差し上げると、行基は馬の耳に次の歌を吹き入れた。「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれて馬の腹止む」。すると、馬は途端に元気になった。行基はその塩サバを海に戻すと鯖は生きかえって元気に泳ぎ去ったという。いつの頃からか行基が弘法大師に置き替わった。昔の峠は何処でも難所であった。この難所を安全な旅ができるようにと、峠では「手向け」の習慣があった。即ち、峠の神様に供え物をして旅の安全を祈るのである。その供え物で一番普通なのが弁当の残りなどの米粒「生飯」であった。「生飯」が間違われて「鯖」になったそうだ。

峠の手向けの神が生飯を要求したという話が、弘法大師が鯖を要求したという話に変わって、弘法大師像に鯖を持たせたり、弘法大師像の前に鯖を供えるようになった訳であろう。また、現在の地名「鯖瀬」はかつては「鯖施」と書かれていたとも……。何やら、出来過ぎた話ではある。



(江戸時代に出版された遍路ガイドブック・有弁真念著「しこくへんろみちしるべ四国徧禮道指南」より引用)

10月28日 (鯖瀬～高知県東洋町・生見)

ほぼ海岸伝いに高知県に入る。途中、海陽町浅川の汽水湖・海老ケ池に道草。

7:00 海山荘発⇒8:00 浅川駅⇒9:00 海老ケ池小休⇒「四国の道」経由⇒11:00 海部駅⇒11:30 小那佐（路傍のお好み焼き屋で昼食）12:00 発⇒13:30 道の駅「穴喰温泉」⇒甲ノ浦「道の駅・東陽町」でコーヒータム1時間⇒16:00 東陽町生見着。本日の歩行距離＝20km。

宿泊は、遍路宿は満員（殆どサーファー）、「ホワイトビーチホテル生見」泊。シングル素泊まり 5,200 円。ホテルにはインバスも共同浴場もなし、露天の共同シャワーのみ。ユカタもタオルも無し。

レストランのメニューも悪し。部屋のエアコンもコイン・エアコンで有料。イトコ全く無し。



(海老ケ池)



(阿波海南付近の「四国の道」)



(次の札所・室戸岬の24番最御崎寺まで44km)



(徳島県から高知県に入った。東洋町)

10月29日 (生見～室戸市佐喜浜町尾崎)

ズ～ッと海岸沿いに歩いて室戸市に入り、鹿岡鼻の夫婦岩手前の尾崎集落まで歩く。

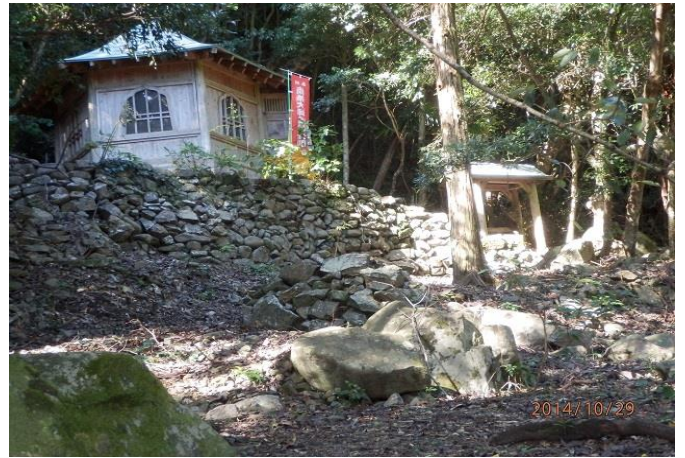
食事が評判の民宿「徳増」は満員。「ロッジおざき」泊、本日は食事の用意ができずとのこと、B&B 4,650 円。まあまあの宿。

- 一期一会 千葉県八千代市の丑山ご夫妻。千葉から車で来られていたが、ご主人は本日の目標地点に先に車を置いて来てジョギングで戻り、途中で徒歩の奥様と合流されて歩き遍路をしているそうで、ご主人は往復2倍の距離を踏破されていることになる。この人には途中で車に乗せて貰ったりしてお世話になった。
- 昼食は佐喜浜の遍路食堂「みかど」で喰った。汚い店ではあったが、安くてオバサンの愛想も良い店だった。本日の夕食はロッジでは出ないことが分かっていたので、少し遠いがタクシーでもこの店に呑みに来るかもしれないと独り言を言った。後で上の丑山さんもここで昼食を摂られたそうで、丑山さんも美味しい魚が喰

いたくて再び夕食に来たいと話されたところ、オバサンから、それでは同じロッジに泊まると言っていた遍路が1人いたので、この人も同乗させて来て下さいとのことだったそうで、夕方車に同乗させて貰って「みかど」で刺身を喰い、ビールを飲んだ。遍路宿がある町でも、居酒屋がある所は少ないので、このような食堂は有り難い。普通は4日に一度くらいしか居酒屋がある町には泊まれないので、居酒屋がある町では遍路宿ではなく、ビジネスホテルなどに泊まって一杯兼夕食は居酒屋に行く。



(大波・大風の日には石がゴロゴロと鳴るごろごろ海岸)



(途中の即身成仏「法海上人堂」)



(仏海庵)



(水はホースが故障中で出ず)

8:00 生見発⇒8:40 東洋大師⇒(町道経由)9:15 峠(室戸岬見ユ)⇒10:40 法海上人堂⇒12:15 仏海庵⇒13:20~14:00 遍路食堂「みかど」⇒途中「海を見ていたジョニー」30分⇒15:30「ロッジおさき」(泊)。本日の歩行距離=20km。

10月30日 (佐喜浜町尾崎～24番最御崎寺～25番津照寺～26番金剛頂寺～室戸市元甲)

- 土佐最初の札所・室戸岬の最御崎寺(東寺)から西寺の金剛頂寺まで。
- 今日も終日太平洋を見ながら室戸岬の海岸道路を歩く。ロッジを出て2時間ほどで室戸岬の突端に着。大きな「室戸青年大師像」が建っていた。その下に御厨人窟(御蔵洞)と神明洞、奥の院「虚空蔵窟(求聞持窟)」。これらの窟は、空海が修行した頃は波打ち際で荒波に曝されていたのであろうが、今は観光バスが入る観光地広場になっている。空海の自叙伝「三教指帰」の序に、『阿国大滝岳にのぼり攀ち、土州

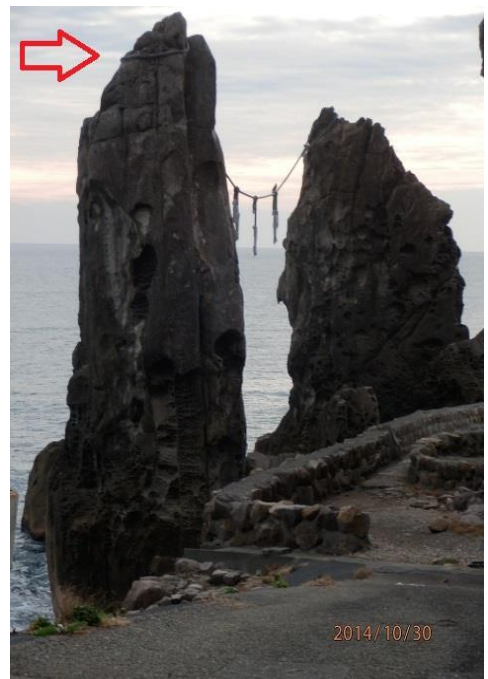
室戸崎に勤念す。谷響を惜しまず、明星来影す。」とある“明星来影す”とは、空海が室戸岬の洞窟で求聞持法を修業している時、東の空から明けの明星が口の中に飛び込んで来て求聞持の法（虚空蔵菩薩の真言を百万回唱える*ことによって記憶力を増進させる法）が成就して験力が付いたという意味だそう。

遍路本などの解説では、この洞窟が御厨人窟（御蔵洞）であると書いてあるが、前出の宗教学者・五来重博士の説では、御厨人窟は空海の付き人が食事などの用意をした場所で、大師が修験をしていたのは奥の院「虚空蔵窟（求聞持窟）」の方が正しいそうだ。因みに、阿国大滝岳とは阿波の第21番札所太龍寺の舎心ヶ岳（捨身ヶ岳）のことであり、“谷響を惜しまず”とは“谷はお経の声に和した”という意味である。小生も早朝の一刻、この虚空蔵窟に籠って太平洋から昇る旭日でも拝めば、空海の求聞持法まではいかなくとも何ほどこかの験が得られるかもしれないと思ったが、残念ながらこの地は真昼の通過タイムであった。これらの洞窟の下の方には奇岩怪石や、空海が湯浴みしたという珍しいポットホール（岩の窪みに入った石が波に揉まれて周りの岩壁を丸く削った丸池）などもあって、如何にも修行の地の感じがした。



（佐喜浜・鹿岡鼻の夫婦岩）

夫婦岩の注連縄。天辺に縄が掛けてあるが ⇒
左の岩の天辺には一体どうやって掛けたのか？



（24 番最御崎寺まで 17km）

←今回のスタート地点、日和佐（薬王寺）から遥々61km 歩いて来た。
土佐最初の札所 24 番最御崎寺まで残り 17km に近づいた。



（いよいよ室戸岬着。室戸青年大師像）



(左＝御厨人窟[御蔵洞]、右＝神明洞)

御厨人窟の内部祭壇⇒

↓ (奥の院「虚空蔵窟(求聞持窟)」)



ここから急な山道を30分程登ると最御崎寺。反対側の車道から団体バスで来た多くの参拝者で満員であった。大体が関西方面からの団体が多い。寺の直ぐ下には有名な室戸岬の灯台もあった。最御崎寺からは室戸スカイラインを津呂港へ下ったが、ウネウネと曲がった長いヘアピンカーブで日差しを遮る物も無く、既に11月というこの時期にTシャツ1枚でも真夏並みの汗だくとなった。



(24番最御崎寺)



(室戸スカイライン。後方の港が津呂港)

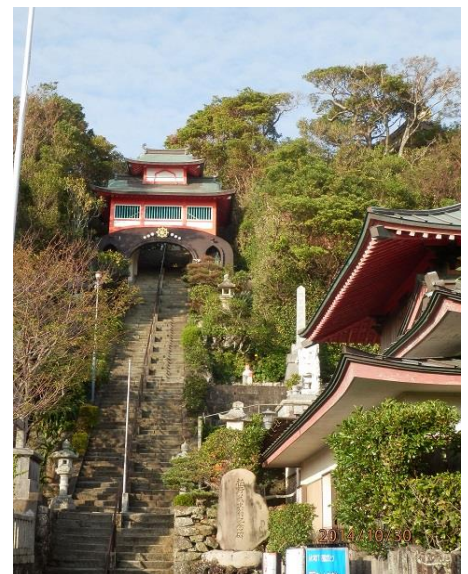
「最御崎寺」は「ほつみさきでら」と読む。「ほつ」とは「火つ御崎寺」のことであり、平安時代の頃までは「火つ御崎」と書かれていたが、以降は間違っ^てて岬の最も先端という意味で「最」が当てられたそう^だ。よ^って、修験者がこの室戸岬の高台で火を焚いていたことが推測できる。岬や山の天辺で焚く火は、龍神や遠い海の彼方のニライカナイの仏に供える火であった。山伏の護摩の火もこの流れであろう。岬の先端や山の天辺で燃やされる火は海上の船にとっては灯台の役も兼ねるから、例えば徳島県の吉野川の山奥にある12番札所「焼山寺」で焚かれていた火は紀伊半島を通る船の灯台でもあった。因みに、「焼山」とは、山が焼けるほど大量の火が燃やされたことによる山名だそう^だ。四国遍路の札所は、45番岩屋寺などの極く一部の寺を除けば他は全て海が見える寺であるから、護摩の火を焚いて灯台の役目もしていたのであ^らうし、またその籠所の建物や食糧や薪なども海を生業とする人々から寄進されていたものであ^らう。

「前々ページ*の注」求聞持法

求聞持法とは、虚空蔵菩薩の真言「おん ばさら あらたんのう そわか」を百万遍唱えることによって、記憶力抜群の超能力を得る方法である。この真言は短いものであるが、口に出してゆっくり唱えれば1回唱えるのに5秒程掛かる。この計算でいけば、1日に1万回唱え続けても(毎日14時間)100日間かかる計算になる。五来重氏によれば、人間魚雷「回天」の特攻隊員として九死に一生を得た哲学者上山春平が実際にこの求聞持法をやってみたところ、何もしないでこの真言だけを唱え続けることは非常に退屈な苦行だそう^で、その退屈を紛らわすために行道をしたり火を焚いたりしながら真言を唱えるのだそう^な。そうい^えば、求聞持法の修業は行道と聖火のセットになっているのは、実はこのような俗な理由からであ^ったのかも知れない。余談であるが、1万回という大きな数をどのようにして数えたのであ^らうか？

さて、津呂の町に入ると、港(津呂港、今は室戸岬港)のすぐ上に鯨神社の王子宮があ^った。ここは、紀貫之が土佐ノ守の赴任を終わって帰京する時に風待ちをした湊だそう^で、港のどこかに紀貫之と、後世この湊を大改修した土佐藩の家老野中兼山の碑があるそう^だが、閑散とした昼下りの港には全く人影も無く、聞く人もいなかったの^で探し当てられな^かった。

25番津照寺(単に津寺と呼ばれる)は、ここから急な階段を120段ほど登る。台地の狭い突端にへばりつくように建っているが、目の下は紺碧の大平洋で、この寺が海で仕事をする人々の厚い信仰を受けていたこと、目当て山であ^ったことが肌で感じられた。昔、土佐藩主山内一豊が室津沖で暴風雨に遇って難破しかか^った時、どこからか若者が船に現れて楫を取り、無事この津呂ノ湊に船をつけてくれてそのまま姿を消してしま^ったが、その時この津照寺の御本尊延命地蔵がびっしょりと濡れていたの^で、この地蔵が楫を取ってくれたのだという話にな^って、この地蔵さんは楫取地蔵と呼ばれるようになったと^か。この言い伝えは、かつて海洋宗教や補墮落信仰など、西方浄土からの仏様やニライカナイからの神様が来迎されたものが「楫取」であり、また、「楫取地蔵」はそのような海神が仏教化したものであると思われ^る。



(津照寺)

津寺の次の札所は西寺と呼ばれる金剛頂寺である。元々、室戸岬には東西二つの行場があ^って、東が室戸岬突端の洞窟(今の最御崎寺奥の院)、西が行道岬(今の行当)の山頂の行場であ^った。この二つの行場が金剛定寺と呼ばれた。奈良時代のことである。その頃も真ん中の津寺はあ^ったが、この寺は漁民の守り寺で、札所に加入したのは室町時代にな^ってからだそう^だ。この東西2箇所の行場は距離も10km程度で、「行道」(修

行)のために1日で往復するには手頃な距離であった。「行道」では金剛界と胎藏界をセットで巡るのが原則で、この場合には修験の地が山である行道岬(西寺)の方が金剛界、東の室戸岬の虚空蔵窟(求聞持窟)が胎藏界に相当している。ふたつの行場を包めた金剛定寺は、やがて東寺が最御崎寺、西寺が金剛頂寺となった。

ここで、少し「行道」に関する蘊蓄(五来重博士の受け売り)を傾けておきたい。上でも書いたが、西寺(金剛頂寺)の突端は今では地理院の地形図でも「行当」という地名になっているが、これは正しくは「行道」である。行当岬の突端には不動岩という大きな断崖があって、ここの岩塔に座って空海が修行をした。大師堂もある。「行道」とは、行を行う場所でもあり、また修行と言う行為を表わす言葉でもある。「行道」は巡る範囲によって、「大行道」、「中行道」、「小行道」に分けられる。四国全体を巡るような行道を大行道、上の西寺・東寺程度の距離を巡るのを中行道、行当岬などの岩場を一日に数百回廻るのを小行道と呼ぶ。小行道は危険な岩場などが多く、これを無念無想で転落しそうになりながら伝い歩くのだそう。今の地獄覗きの苦行もこれに当る。ここの行当岬の岩場で、柵の外側に出てトラバースなどをチョット試みてみたが、股の下に荒波が砕け散っていて海鳴りの音も物凄く、それはそれは怖いものであった。クライミングで言えば5.11dをリードで登っている感覚であったワイ(行当岬については下記写真参照)。かつては、ここが金剛頂寺や最御崎寺への女人結界となっていて、女が籠る不動堂もあった。[行当岬へは、実際は27番神峯寺への途次の翌日の朝に立ち寄った]。金剛頂寺へは、本日の宿「民宿うらしま」(室戸市浦島)にザックを預けて空身で登ったが急な山道30分の登りは結構きつかった。本尊の薬師如来は、完成後自ら厨子に入ったとされる秘仏で、千数百年間見た者はいないという。寺で偶々千葉の丑山さんにまた会い、民宿まで車で送って貰えて助かった。



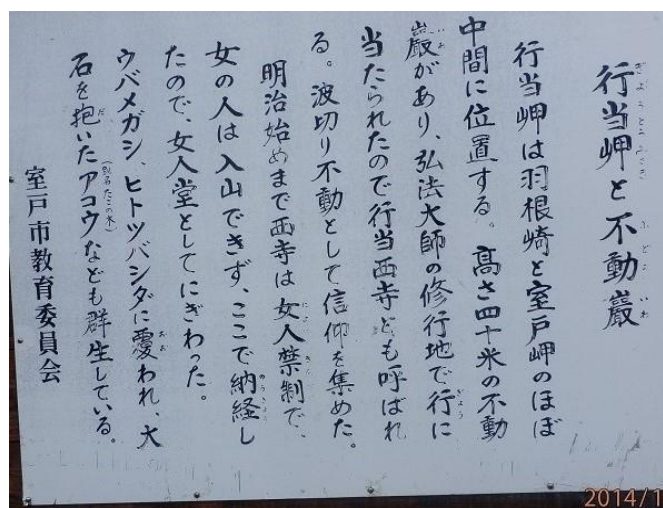
(室戸市「元海岸」付近から暮れゆく金剛頂寺の塔頭尖塔と行当岬を望む)

7:15「ロッジおざき」発⇒9:00 椎名⇒11:30~12:00 室戸岬御蔵洞(弁当)⇒急な山道20分⇒12:45 最御崎寺
13:15 発⇒15:15 津照寺⇒16:15「民宿うらしま」~金剛頂寺往復(往=急な山道30分、復=丑山さんの車)

「民宿うらしま」、2食付6400円。食事もあり良くない。全体にNGであるが、ここ以外には宿無し。

※本日の歩行距離=26km。

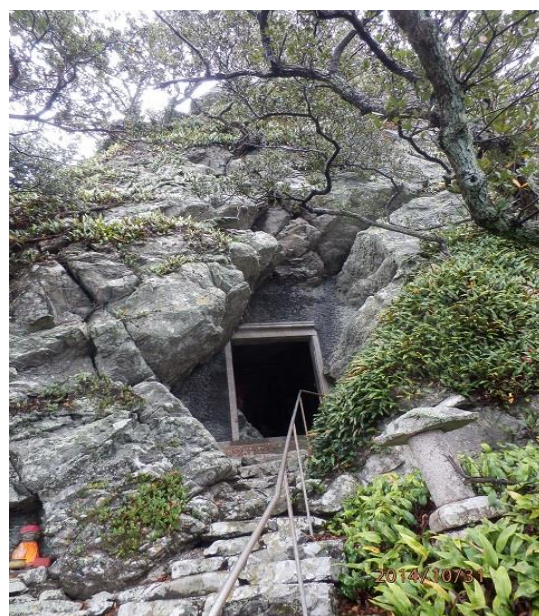
【以下は行当岬の写真】



(空海修行御座石)



(不動岩の女人堂)



空海が修行した窟⇒



【上左】江戸時代の遍路装束

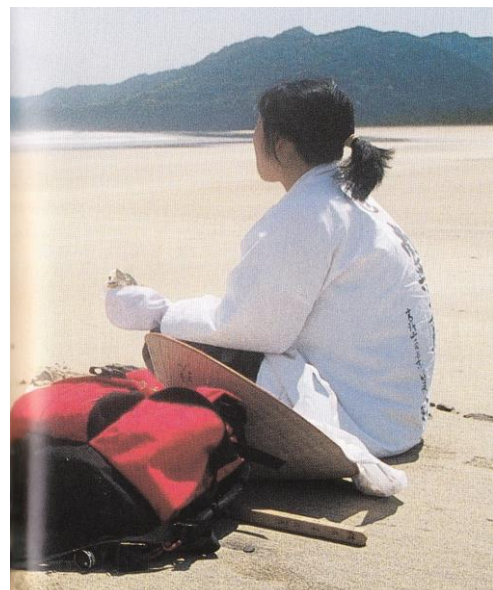
江戸時代出版された遍路ガイドブック・
有弁真念著「四国徧禮道指南」より。



【上右】女性の遍路が好奇の目で見られていた大正の頃、後に女性史のパイオニアとなった高群逸枝が
24歳で遍路した時の装束。高群逸枝著「娘巡礼記」（岩波文庫）より。



(少し前の装束)



(今はこれが主流)

10月31日 (室戸市元甲～安芸市中心街)

●本日は朝から雨であった。雨の場合は、蓑笠で歩くか、遍路宿に沈殿するか、電車やバスの便があればそれに乗って移動するかしかないが、蓑笠で歩くほどの信仰心はなく、宿に一日中沈殿するのも能が無いので、今日は途中の一部にバスを使うことにした。今日の遍路は27番^{こうのみねじ}神峯寺一寺のみ。土佐で唯一の山上の札所。宿を出て、前ページで書いた行当岬の不動岩に参ってから、道の駅「キラメッセ室戸」に停めた車に泊まっていた前出の丑山さんにお別れの挨拶をして歩き出したが途中から雨が激しくなってきたので、黒耳第二バス停から神峯寺への登山口である「唐の浜」までバスに乗った(乗車時間35分、乗車距離20km、運賃950円)。唐の浜のドライブインで雨が止むのを待ちながらコーヒータイム。

神峯寺は唐の浜から往復8km、標高差450mあり、結構きつかった。唐の浜から往復3時間の歩き。

7:15 民宿「うらしま」発⇒7:45 不動岩(8:00 発)⇒9:10「黒耳第2バス停」バス乗車⇒9:45「唐の浜バス停」着・同発10:15⇒11:45 神峯寺着(12:30 発)⇒13:25 唐の浜着(ドライブインで昼食、同発14:00)⇒15:30 道の駅「大山」⇒17:00 安芸市・中心街「ホテル・タマイ」着。夕食は近くの居酒屋「白牡丹」。

※ホテル・タマイは素泊まり6,400円。コインランドリー500円。値段の割に全くNG。

※本日の歩行距離25km、バス乗車20km、合計45km。



(昔の神峯寺の登山口には坂本屋という旅籠があり、「坊さんかんざし」の駆け落ちの相手「お馬」が追放されて奉公していた)



(土佐唯一の山上の札所、神峯寺。山頂の寺塔)



(神峯寺)

このような看板もあった ⇒



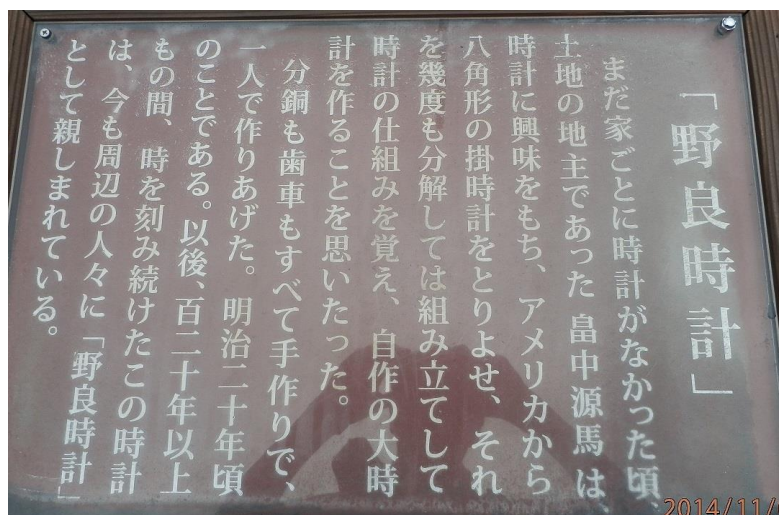
11月1日 (安芸市中心街～高知市中心街)

●本日も雨。28番大日寺から30番善楽寺まで巡礼、高知市街に入る。安芸市のシンボルともなっている野良時計を往復した後、遍路途中の吉村昭「漂流」の主人公野村長平の墓と顕彰碑、狩野派の絵師でおどろおどろしい芝居絵の広瀬金蔵の資料館・土佐赤岡の「絵金蔵」が本日のメインイベント。雨の中を大急ぎで廻った義務的巡礼のためか、本日の札所の記憶は殆どなし。安芸市は三菱財閥の創始者岩崎弥太郎の生家であるが、歩けば市街地より往復2時間は掛かるので今回はパス。

7:30 ホテル発⇒野良時計・安芸市武家屋敷往復⇒8:20 安芸市中心街に戻る⇒9:30 土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線「穴内駅」着・電車待ち 10:20 同駅発⇒10:38 同「香我美駅」着。野村長平碑、「絵金蔵」見学。隣駅の「赤岡駅」まで歩いて駅高架橋下でコンビニ弁当で昼食。12:56 電車で野市駅 13:00 着)。28番大日寺まで歩往復1時間半。14:20 野市駅発⇒14:28 御免駅着。御免駅より雨の中をタクシーにて29番国分寺まで往復(1,650円)。15:43 御免駅乗車⇒15:55「土佐一宮駅」着⇒16:30 善楽寺。善楽寺付近で遍路宿を探しても廃業していて無し。遍路に人気があるという「サンピャ」は満員。

大雨で身動きとれず。タクシーにて高知駅に出て、駅の旅館案内で宿を探して貰い、高知駅近くの「土佐別館」泊。なかなかによろしい遍路宿(商人宿)であった。B&Bで4,700円。朝食も良かった。近くの居酒屋「吾平」で一献。

※本日の歩行距離 20 km、電車 30 km、巡礼合計 50 km。



2014/11/01 (安芸市の野良時計)



(野村長平の墓、顕彰碑、銅像。土佐くろしお鉄道「香我美駅」付近)



(絵金蔵)



(土佐赤岡の町はかつては通商・海運で栄えた)

⑦山城屋
四層の水切りのある土蔵造りは赤岡商家の代表的建築様式を留めている。屋号から廻船業として京阪地方との往来があったのであろう。
暖簾分けとして塩の販売権を譲ったり出していたとかで、雇女が採種のため桑の実を踏み潰すと、香宗川が真っ赤に染まったという話も伝えられている。



(横丁にはこのような看板も 土佐赤岡)



(国分寺 重要文化財の金堂)



(国分寺 山門)



(善楽寺)

11月2日 (高知市中心街～31番竹林寺～32番^{ぜんじぶじ}禅師峰寺～33番雪隠寺)

●高知市の中心街から南東にある五台山に登って竹林寺に参り、浜に下って禅師峰寺から裏戸湾に戻って裏戸大橋の袂から県営フェリーで長浜に渡り雪隠寺に詣でた。

竹林寺は、「四国八十八カ所御開創千二百年」で賑わっていた。この寺の御本尊は四国八十八カ所札所唯一の文殊菩薩であり、文殊菩薩の中でも日本最古のものと言われている。言うまでもなく、文殊菩薩は知恵の仏である。「高知」という県名は、この竹林寺の文殊菩薩に因んで付けられたそう。この秘仏は50年に一回のご開帳であり、また乗っている獅子座は、通常は400年前の江戸出開帳の折に作られた獅子に騎乗されているが、この度のご開帳では300年振りにご本尊造営当時(平安時代)の獅子座に乗ってお出ましになっているそう。大枚1,000円の拝観料を払って御本尊を拝まして頂いたが、内陣が暗くてよく見えなかった。

「坊さんかんざし」の僧「純信」はこの寺の学僧で、懸想した町娘の「お馬」に逢うために毎晩2里の道をはりまや橋まで通ったという。誠にご苦労なことであった。

五台山を下って峰寺と呼ばれている土佐湾沿いの3番禅師峰寺に行った。この辺りには温室野菜栽培のビニールハウスがズラリと並んでいた。ここから裏戸大橋袂まで歩いて、裏戸大橋ができるまでは本来の遍路道であった裏戸湾横断の「海の遍路道」を渡船で渡った。高知県が運行している無料のフェリーで、種崎渡船場から対岸の長浜渡船場まで乗船時間4分。渡船場を降りてトコトコと雪蹊寺まで歩いて行った。「雪蹊」とは雪が積もった上を最初に歩いた足跡のこと。物事のパイオニアのことを指す。

裏戸湾の対岸が例の桂浜である。折角来たのだからと、山門前からタクシーに乗って桂浜まで往復して貰った(往復2,730円)。

7:30「土佐別館」発⇒9:30 竹林寺拝観(10:00 同寺発)⇒12:30 禅師峰寺(12:50 発)⇒13:40 一膳飯屋「大高坂」でビールで昼食(14:10 発)⇒15:10 種崎渡船場発⇒15:15 長浜渡船場⇒15:40 雪蹊寺⇒遍路宿「高知屋」。
桂浜までタクシーで往復。本日の歩行距離=20km。

※遍路宿「高知屋」は雪蹊寺山門前、2食付6,500。なかなか結構。宿に入る時に金剛杖を洗ってくれ、下着まで洗濯してくれてちゃんと畳んで返してくれた。若いオカミであったので、猿股を出すのが恥ずかしかった。

※本日歩いた竹林寺～禅師峰寺～雪蹊寺の間は遍路道標^{みちしるべ}が殆ど無いので迷いやすい。



(五台山への途中の橋上にあった「坊さんかんざし」道祖神?)



(五台山から高知市街)



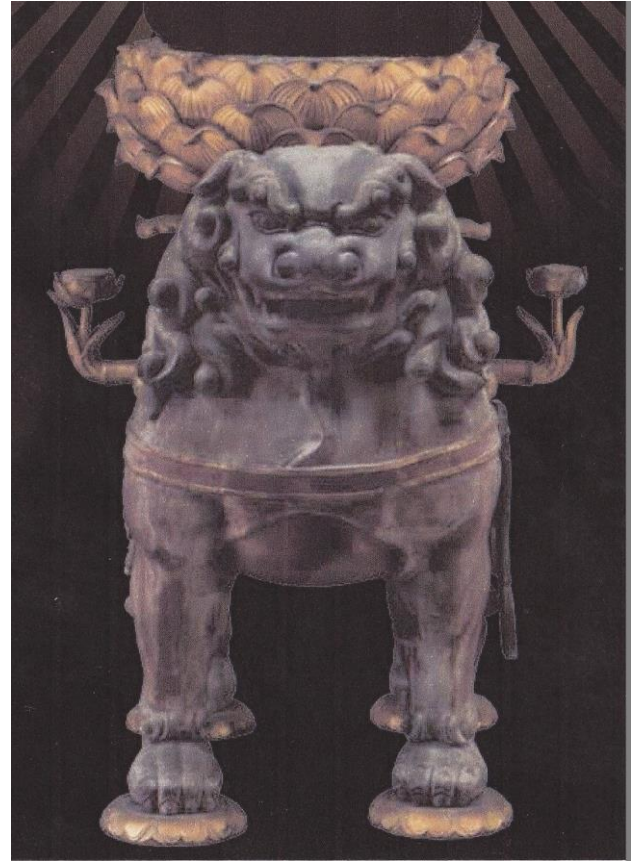
(五台山 竹林寺)





↑ 竹林寺文殊菩薩の騎乗獅子（初代、平安時代作）

同（2代目、江戸時代作）⇒



（禅師峰寺）



（禅師峰寺から裏戸湾。左奥が桂浜、右奥が裏戸大橋）



（海の遍路道、裏戸湾フェリー）



（雪蹊寺）

11月3日 (33番雪蹊寺～34番種間寺～35番清滝寺～36番青龍寺)

●吾南平野の平坦な田園風景の中を西に向かって歩き、仁淀川を渡って土佐市の清滝寺に詣で、それから南下して宇佐大橋を越えて浦ノ内・竜岬の青龍寺まで行った。

まずは先に甲殿にある種間寺の奥の院を訪ねた。この辺りは遍路みちしるべが全く無く、ビニールハウス農作業をしているオジサンに道々尋ねながら歩いた。奥の院はちょっとした岩場の洞窟で、岩屋神社と同居していた。神仏分離の前は田舎の寺や祠はどこでもこのような神仏習合だったのであろう。

種間寺の門前でお接待にミニトマトを掌一杯頂いたので、山門の下を借りておいしく頂戴した。種間寺は弘法大師が中国から持ち帰った五穀の種を寺域に蒔いたことからの命名と伝えられているが、なるほど付近はのんびりした田園地帯でビニールハウスではキュウリなどの栽培が盛んであった。「種」ということから安産の御利益もあるそうで、底が抜かれた柄杓が沢山奉納されていた。

土佐市街地北方の石土ノ森山(石鎚山が見える山)の中腹にある清滝寺までは結構キツイ道中であつた。この辺りは高速道路の工事中で至る所道が寸断されていたので、ショートカットしようと思って田圃の畦道に入るところ、途中で沼のようになった泥田に阻まれて、またスグスグと引き返す一幕もあって、往生した。この寺の山門の天井には立派な龍の絵が描いてあつた。お寺で売っていた50円の柿1ケで昼食。

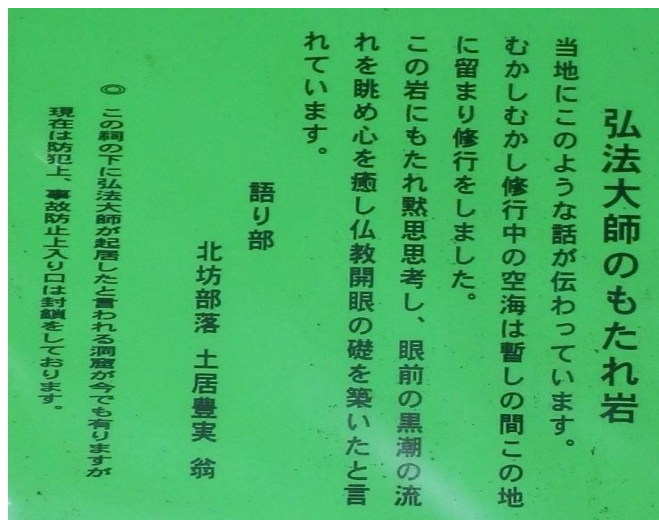
清滝寺から次の札所青龍寺までは5時間かかる。時既に午後2時。途中で切って泊まろうにも青龍寺までは宿がない。また、土佐市街地には2軒ほどの宿もあるが、今の時間から投宿するのも勿体ないし、居酒屋も夜にならないと開かない。バスの時刻を見ると、青龍寺の近くまで行く最終バスが未だ1本あつた。ここは「時は金なり」で今日中に札所をもう1箇所進めておくに限る。

土佐市街から峠を越えて宇佐湾に抜ける遍路道は「塚地峠」と呼ばれて、かつては「塩の道、鰯の道」の古道であつたそうで、この道を歩きで宇佐に入りたかつたのであるが、マ、これもよしとしよう。青龍寺には納経受付ギリギリの夕方5時に着いた。この寺の裏の岬突端が土佐湾に落ちる断崖絶壁の上に奥の院不動堂がある。この奥の院の下には修行の洞窟があり、そこは舟でしか行けない場所だそうで、奥の院派には是非覗いてみたい場所であるが、残念ながら真つ暗闇のなかでは如何ともしがたかつた(翌朝は浦ノ内湾・横浪行の朝一番の巡航船に乗ったので、奥の院に行く時間が無かつた)。

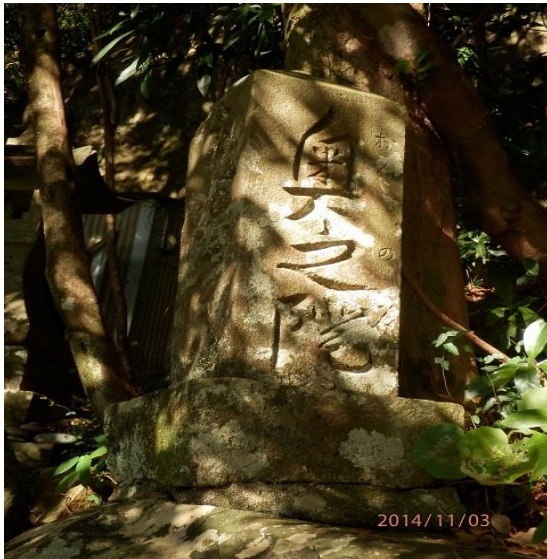
7:10 雪蹊寺発⇒8:45 種間寺奥ノ院(探すのに45分ロス)⇒10:00 種間寺(10:30 発)⇒13:30 清滝寺⇒15:00 土佐市街中心部(汚い一膳飯屋でビールでバスの時間待ち、16:00 バス乗車)⇒

16:30 バス「竜」終点⇒17:00 青龍寺。 本日の歩行距離=28km、バス=12km、合計40km。

※岬裏の「国民宿舎土佐」は満員。「三陽荘」なる遍路宿に泊。ここは遍路宿というよりも、遍路団体ツアー専用の温泉観光ホテル。ツインルームのシングルユース2食付で約1万円。食事の品数多。巡航船までの送迎あり。



(種間寺・奥ノ院付近の「もたれ岩」)



(種間寺・奥ノ院の石碑)



(奥ノ院の小さな看板。左の洗面台が手水舎。左の石碑の立派さと大違い!?)



(種間寺)

同 安産御礼の底抜け柄杓 ⇒



(36番 青龍寺)



(土佐市郊外から35番 清滝寺 [中腹])

11月4日 (36番青龍寺～浦ノ内湾～横浪三里～須崎)

●宇佐湾から須崎方面に喰い込んだ浦ノ内湾は横浪三里と呼ばれるリアス式の大きな内湾で景色が良い所であるが、入り組んだ長い海岸線をグネグネと迂回を繰り返すために前に進んだ気がしない道だそう。昨晚の宿で逢った遍路の話では、弘法大師もここは舟で横浪へ渡ったらしいと話していたので、「同行二人」の建前をよいことにこの話に便乗することにした。巡航船の一番は朝7時発であるから、それに間に合うように青龍寺の奥ノ院まで往復しようと早朝4時に早起きしたが海も空も分からない真っ暗な闇夜で、奥ノ院は諦めた。

横浪三里は内陸に深く入り込んだ波静かな内湾で、大平洋の外海とは横浪半島で隔てられている。養殖漁業が盛んであるらしく、湾内の至る所に大きな生簀が浮かべてあった。巡航船は、対岸の横浪の学校に通学する横浪半島の生徒のために公営で運行されているが、乗船賃を払えば一般乗客も載せてくれる仕組みになっている。生徒を拾うためにあちこちの岬や波止場(と言っても単なる磯岩の突先)に寄りながら巡航するので、旅行者にとっては結構な観光船となる。

横浪で下船し須崎を目指して県道23号をトコトコと歩いた。この辺りまで来ると、歩き遍路には殆ど遇わなかった。今回は須崎迄で打ち止めとし、須崎のJR「多ノ郷」駅から帰宅の途についた。横浪は今回は巡航船に乗ったが、次回チャンスがあれば今度は浦ノ内湾と太平洋に挟まれた横浪半島を縦貫する横浪スカイラインを歩いてみたい。

6:45 ホテル発⇒巡航船乗り場「埋立」⇒8:00 横浪(下船)⇒10:30JR 多ノ郷駅。

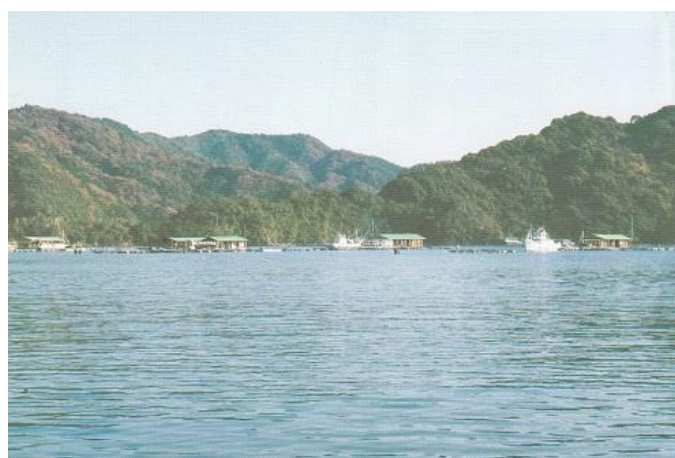
※本日の歩行距離=10km、巡航船=14km、合計24km。



(早朝の巡航船乗り場「埋立」から浦ノ内湾)



(巡航船の運転台から)



(養殖の生簀。生簀の上に大きな建屋が載っている養殖工場!?)



(巡航船)

(「第1回歩き遍路」土佐ノ巻その1了)

「第1回歩き遍路」目次に戻るには、ブラウザーの戻るボタン  で戻って下さい